

# アジア研究図書館

編集・発行：東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門（RASARL）

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学附属図書館 アジア研究図書館担当 [asialib@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:asialib@lib.u-tokyo.ac.jp)

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

## 第6号 目次

アジア研究図書館活動報告		連載・アジアの言語・文字体系 第6回	7
鈴木 舞「2021年度図書館総合展 出展報告」	1	須永 恵美子「こだわりのウルドゥー語フォントの世界」	
澁谷 由紀「ライブラリアンのためのベトナム語・タイ語用語集」	6	アジア研究図書館利用案内	10
		次号の予定	10

## アジア研究図書館 活動報告

### 2021年度図書館総合展 出展報告

鈴木 舞(東京大学附属図書館)

月の開館後、今回が初めての出展となる。本稿は、その参加報告である<sup>(2)</sup>。

#### 1. はじめに

図書館総合展は、館種を越えて図書館界全体の交流・情報交換を行う場として、図書館総合展運営委員会の主催により、毎年秋に開催されてきた。本展は、1999年の初開催以来、今年度で23回目を迎える。例年はパシフィック横浜を会場に3日間の会期で対面開催の形で行われてきたが、2020年初頭以来の新型コロナウイルス拡散の影響を受け、2020年度は11月の1ヶ月間、webページ上でのオンライン開催となった。2021年度は「図書館総合展 Library Fair&Forum\_ONLINE\_plus」と題して、オンラインでの出展を中心としながらも、これに加えて各地のサテライト会場が設けられ、ハイブリッド方式での開催となった<sup>(1)</sup>。東京大学アジア研究図書館(以下「当館」)ではこの秋、図書館総合展(会期:2021年11月1日～11月30日)へオンライン出展した。昨年10

#### 2 開催方式について

今年度の図書館総合展は、先述のとおり、オンライン及び対面のハイブリッド開催であった。オンラインの中には、webページやポスター作成、オンラインでのイベント開催や、“在席時間”を設けて、相談会を開催する出展者も見られた。また、各館の紹介映像が閲覧できたり、VR技術を用いた図書館内部のオンラインツアーを行っている出展者もあった。従来型の大会場での出展方式や、通常各図書館HPや企業HPでは得られなかった利点として、全国の図書館やその書庫などを、気軽に“訪問”することができる。また、ハイブリッド方式ということで、数は少ないながらも、個別に物理的な会場(サテライト会場、出展者自らの館・施設や企業のショールームなどが多い)を用意し、対面式出展の試みも見られた。

東京大学

2020年10月1日開館

# 東京大学アジア研究図書館

専門の研究スタッフが、高度な研究支援機能の開発や日本におけるサブジェクト・ライブラリアン制度の確立にむけて活動しています

### 研究資源の集約化

- 東京大学内のアジア研究資料の移管
- IIIF画像によるデジタルコレクション  
碑帖拓本・水滸伝・エジプト研究など
- 個人文庫 アジア研究者旧蔵書  
辛島昇・桜井由躬雄・末廣昭・奈良毅・古田元夫
- 各種アジア関係データベース
- 台湾漢学リソースセンター資料

### 研究とアウトリーチ

- アジア言語の目録作成ワークショップ
- シンポジウム・セミナー

### 地域別オリジナル分類

東アジア	東南アジア	南アジア	中央ユーラシア	西アジア
1	2	3	4	5
1-01 # 200 Era	2-02 # 720 48J	3-05 # 300 517	4-01 # 200 d alt	5 # 200 c alt 1

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学アジア研究図書館 (総合図書館 4F) <https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

図書館総合展での当館ポスター

### 3 東京大学アジア研究図書館の出展内容

このような開催方式の中、当館では、今回の出展に際して、対面開催時にも行われてきた従来型の形式であるポスターの作成(下図参照)、それからオンライン開催ならではの形式として、webページの作成(本稿第5頁参照)を行った<sup>(3)</sup>。作成したポスターは、webページ内に掲載され、PDF化された電子データは、“来場者”が自由にダウンロードできるように設定することが可能となっている。また、webページでは、作成者(出展者)はリンクを自由に貼ることができる。自館のHPのリンクを貼るなどして、“来場者”らに更なる情報への容易なアクセスを促すことができる作りになっている。これらは、オンライン開催ならではの利点であろう。

当館ポスターでは、上半分には当館の開架書架及び閲覧室のカラー写真、それからアジアの地図をレイアウトしている。下半分は、当の特色である「研究資源の集約化」「研究とア

ウトリーチ」、また地域別の分類・配架について、いくつかのキーワードや写真、これまでのセミナー・シンポジウムなどのポスターを再掲することで、視覚的に伝えている。

1つ目の項目「研究資源の集約化」では、2011年以来の設立準備段階で、当館の資料収集の柱となってきた、東京大学内の各部局からのアジア関係図書の移管や、東京大学が所蔵するアジア関係資料をIIIF画像にして公開しているデジタルコレクションなどについて触れている<sup>(4)</sup>。また、当館独自のコレクションのひとつとして、当館に寄贈されたアジア研究者の旧蔵書からなる個人文庫があるが、とくに「桜井由躬雄文庫」、「末廣昭文庫」、「古田元夫文庫」といった東南アジアコレクションについては、本号澁谷報告にあるとおり、本webページ上で、別途ポスター及び『ライブラリアンのためのベトナム語・タイ語用語集』(澁谷由紀・宇戸優美子・佐藤章太編)が公開・提供

されている<sup>(5)</sup>。この他、これまでに購入し、当館HP上で提供してきたアジア関係データベースに関する紹介や、台湾漢学リソースセンター(Taiwan Resource Center for Chinese Studies、略称:TRCCS)蔵書についても述べている<sup>(6)</sup>。

2つ目の項目は、「研究とアウトリーチ」である。当館の特色として、大学図書館としては、日本初である「研究図書館」であることが挙げられる。当館の運営には、事務職員・図書系職員だけでなく、アジアの各地域、各研究領域を専門とする当館専属の教員・研究員が10名在籍している(上記ポスター内の左上写真のとおり。なお、顔写真の位置は、おおよそ、各自の専門とする地域を示している)。それらの知識を活かした、アジアの特殊言語、例えばペルシア語、現代ウイグル語について、図書館所属ならではの目録作成セミナーについて、それから東京大学図書館所蔵資料を用いた研究シンポジウムについて述べている。また、当館の目標のひとつである、欧米の図書館では一般化されている「サブジェクト・ライブラリアン制度」の、日本の図書館への導入・普及に関する、これまでの活動について紹介している。

3つ目の項目は、「地域別のオリジナル分類」である。当館では、アジア各地域の資料を「アジア」「東アジア」「東南アジア」「南アジア」「中央ユーラシア」「西アジア」の6つに分類していることを伝えている。この分類の詳細については、当館上廣倫理財団寄付研究部門の刊行した、『図書館がつなぐアジアの知:分類法から考える』に詳しい<sup>(7)</sup>。

また、図書館総合展HP内に作られた当館webページでは、上述のポスター掲載やその内容をやや詳しく述べるとともに、当館の沿革や設立理念などについても、当館HPへのリンクを作成するなどして、“来場者”へ当館の紹介を行っている。webページでは、キーワード欄を設けることができ、各キーワードをクリックすると、同じキーワードをもつ出展者一覧及び

各出展者のwebページを訪問することができる。例えば、当館のキーワードは、「東京大学アジア研究図書館」「大学図書館」「研究図書館」「専門図書館」「サブジェクト・ライブラリアン」「アジア研究」「アジア」「東アジア」「東南アジア」「南アジア」「中央ユーラシア」「西アジア」「コレクション」「デジタルアーカイブ」「IIF」「オープンアクセス」「ライブラリアンのためのベトナム語・タイ語用語集」「タイ」「ベトナム」「多言語」「文庫」「寄贈」「東京大学アジア研究図書館の東南アジア関係コレクション—寄贈資料とその受入過程を中心に—」の23語である。同様の特色をもつ館や、同様の取り組みを行っている出展者(各図書館や関連企業)とのつながりを容易に知ることができる。

#### 4 おわりに

従来行われてきた対面開催の形では、全国の図書館及び図書館関係企業及びそれらに関わる人々が、大会場に一堂に会し、直接的に情報交換・交流することができた。感染症の拡大を防ぐため、イベントそのものの開催や入場者数の制限があらゆる面で設けられている昨今、図書館界もその影響は免れ得ない。その一方、従来型の物理的な交流にもまた、距離や時間の制限というデメリットがあったのに対し、オンライン化されることで、時空を超えた繋がりを容易にするというメリットもあった。

近い将来、コロナ禍が開けた際には、今回、キーワード検索などを通じて、“訪問”し、“新たに出会った”各館を、実地で訪問し、交流する機会などをもつことができれば、と思う。オンラインを中心とした図書館総合展ならではの多くの“出会い”や可能性もまた、沢山あったように思われる。それらは、今後の図書館業務や交流などに活かしていきたい。

註

(1) 図書館総合展の詳細については、2021年度図書館総合展HPをご参照頂きたい。

図書館総合展URL:

<https://www.libraryfair.jp/>

(2) 東京大学アジア研究図書館に関わる出展として、2014年度より当館の設立・運営に携わってきた、東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門では、2018年度より毎年、図書館総合展に出展をしてきた。2020年度のポスター出展では、「アジア研究図書館の開館」に大きく触れている。当該部門による図書館総合展への出展内容については、当該部門HP内の下記URLをご参照頂きたい。

2018年度:

<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/20181009-2>

2019年度:

<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/20181009-2-2>

2020年度:

<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/20201101>

(3) 当館webページの詳細については、以下のリンクをご参照頂きたい。当該ページの公開利用・期限は、2022年度図書館総合展の出展申込の時期まで、つまり来年7月までとされている。

WebページURL:

<https://www.libraryfair.jp/poster/2021/18>

ポスターURL:

[https://www.libraryfair.jp/sites/default/files/2021-10/2021poster\\_asian\\_research\\_library.pdf](https://www.libraryfair.jp/sites/default/files/2021-10/2021poster_asian_research_library.pdf)

(4) なお、現状の当館デジタルコレクションは、研究の一環としてデジタル化したものであり、当館所蔵資料だけでなく、東京大学内の他の図書館(東京大学総合図書館)の所蔵資料も含む。

(5) 当館東南アジアコレクションの報告に関する

詳細については、以下のリンクをご参照頂きたい。(3)で述べたように、公開・利用期限は2022年7月までとされている。

ポスターURL:

[https://www.libraryfair.jp/sites/default/files/2021-11/image\\_SEA\\_2021poster\\_asian\\_research\\_library.jpg](https://www.libraryfair.jp/sites/default/files/2021-11/image_SEA_2021poster_asian_research_library.jpg)

澁谷由紀・宇戸優美子・佐藤章太編『ライブラリアンのためのベトナム語・タイ語用語集』(2021年、全45頁) URL:

[http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/11/SEA\\_2021glossary-Asian\\_research\\_library\\_1.pdf?\\_fsi=EJjLA3ih](http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/11/SEA_2021glossary-Asian_research_library_1.pdf?_fsi=EJjLA3ih)

(6) 台湾漢学リソースセンター(Taiwan Resource Center for Chinese Studies、略称:TRCCS)とは、台湾国家図書館によって2012年より国外の主要大学及び研究機関に設置され、海外の漢学研究・台湾研究との協力体制強化を図る機関であり、東京大学附属図書館には、2014年12月に日本初の台湾漢学リソースセンターが設置された。設置当初、これらの蔵書は東京大学駒場図書館内に配架されていたが、2020年10月当館の開館に伴い、蔵書はすべて当館内の専用書架に配架された。同センターの詳細については、以下のリンクをご参照頂きたい。

東京大学台湾漢学リソースセンターURL:

[https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/trccs?\\_fsi=EJjLA3ih](https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/trccs?_fsi=EJjLA3ih)

(7) U-PARL(東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門)編、『図書館がつなぐアジアの知:分類法から考える』、東京大学出版会、2020年。

ホーム > ポスター



東京大学アジア研究図書館についてご紹介します



2020年10月1日、東京大学にアジア研究図書館がオープンしました。学内に所蔵されるアジア研究資源を核に、人材と知を再編する、新たなアジア研究の場を構築します(アジア研究図書館の理念はこちら)。

- ・ [印刷用PDF]「東京大学アジア研究図書館」ポスター
- ・ [印刷用PDF]「東京大学アジア研究図書館の東南アジア関係コレクション ―寄贈資料とその受入過程を中心に―」ポスター / 「ライブラリ学のためのベトナム語・タイ語用集」発刊記念・宇野優子・池田真由美

**出版社**  
東京大学アジア研究図書館

**URL**  
<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

▲ ポスター及びダウンロード先リンク

**沿革**

2010年 アジア研究図書館構想を含む「新図書館構想」準備会発足  
 2012年 「新図書館計画」の策定、アジア研究図書館の設置計画  
 2013年 総合図書館の改修工事開始(～2020年)  
 2014年 アジア研究図書館上席倫理討問寄付研究部門(U-PARL)の設置  
 アジア研究図書館構築のため、附属図書館に専任の教員・研究員からなる教員組織を設置  
 2018年 アジア研究図書館館長の設置、初代館長に小野塚知二が就任  
 2020年 アジア研究図書館の開館  
 2021年 2代目館長に城山智子が就任  
 アジア研究図書館研究開発部門(RASARL)の設置、専任教員3名の着任

**蔵書の特徴**

東京大学には膨大なアジア関係の研究資源が所蔵されていますが、それらは学内の様々な部局の図書館・図書室に分散しています。当館では、これらを可能な限り集約して運用することで、利用者に総合的で効率的なサービスを提供することを目指します。

当館の蔵書は、こうした学内からの移管資料のほか、寄贈資料や新規購入資料から構築されています。現在、東京大学OPACに登録されている当館の資料は約3万冊を数え、今後5万冊取納可能な開架フロア、および総合図書館地下の自動書庫などの開架書庫には、新たな資料が追加されます。

当館に所蔵されている資料は、アジア(全域)、東アジア、東南アジア、南アジア、中央ユーラシア、西アジアという6つの地域、言語、そして主題に基づく独自の基準で分類されています。OPACでは、地域や主題に絞って資料を検索することも可能です(詳細な分類表や資料の探し方についてはこちら)。

当館は学外者も利用可能です。なお、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、開館日程、開館時間、サービス内容等に変更がある場合があります。最新の情報は「新型コロナウイルス感染症に関連する総合図書館の対応について」をご確認のうえ、ご来館をご検討ください。

**コレクションとデータベース**

アジア研究に関連する多数のコレクションを所蔵していることも、当館の大きな特徴の一つです。研究者個人の自筆書や研究組織の収集資料の受入も積極的に「行っており、各「文庫」として公開しています。その中には、「季島野文庫」、「松井由利雄文庫」、「末廣昭文庫」、「奈良文庫」、「吉田元久文庫」のほか、ユネスコアジア文化センターから寄贈された識字教育資料などが含まれます。現在、東アジア・南アジア・西アジア関係など、様々な地域の個人文庫の整理も進めており、順次公開していく予定です。

東南アジア関係の各文庫については、本ページに掲載されているポスター(「東京大学アジア研究図書館の東南アジア関係コレクション―寄贈資料とその受入過程を中心に―」)も併せてご覧ください。

当館は IIIF形式によるデジタルコレクションの公開にも力を入れており、「東京大学アジア研究図書館デジタルコレクション」にて、碑帖拓本コレクション、水滸伝コレクション、U-PARLコレクション(総合図書館所蔵の南楽文庫、鴉片文庫、青洲文庫の一部、朝鮮関係の資料、漢州語の資料など)、Digital Resources for Egyptian Studies(エジプト研究のためのデジタル資源)などを公開しています。さらに、当館では多くのアジア関係データベースも提供しています。

また、当館の開架書庫には台湾漢字リソースセンター(TRCCS)コーナーを設けており、台湾国家図書館からの寄贈資料が配架されています。今後も当館は、様々な海外研究機関との提携・協力を進め、学術ネットワークの拡大や研究資源の充実化に努めていきます。

**研究活動**

当館では、10名の専任教員・研究員が研究活動を行っており、その成果は、ウルドゥー語や現代ウイグル語といったアジアの特殊言語の資料目録作成ワークショップ、アジアを研究テーマとするセミナー・シンポジウム(詳細はこちら)等の開催という形で社会に還元されています。また、アジア地域の研究や図書館学に深い理解を持つサブジェクトライブラリアンの制度確立に向けても取り組んでいます。その一環として、日本の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアン制度の確立に向けてのシンポジウムを開催しました(詳細はこちら)。

〒113-0033 東京都文京区 本郷7-3-1 東京大学アジア研究図書館(総合図書館4階)  
 アクセスマップ  
 アジア研究図書館: <https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

**キーワード**

東京大学アジア研究図書館 大学図書館 研究図書館 専門図書館 サブジェクト・ライブラリアン  
 アジア研究 アジア 東アジア 東南アジア 南アジア 中央ユーラシア 西アジア コレクション  
 デジタルアーカイブ IIIF オープンアクセス ライブラリアンのためのベトナム語・タイ語用語集 タイ  
 ベトナム 多言語 文庫 寄贈  
 東京大学アジア研究図書館の東南アジア関係コレクション ―寄贈資料とその受入過程を中心に―

◀ キーワード



## こだわりのウルドゥー語フォントの世界

須永 恵美子

(すなが えみこ 東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) 特任研究員)

北インドからパキスタンまで、南アジアを中心に話されているウルドゥー語は、口語ではヒンディー語とほぼ同一であるが、ヒンディー語がデーヴァナーガリー文字（本連載の第4回参照）で書かれるのに対し、ウルドゥー語はアラビア文字で記される点が大きく異なる。一つの言語を二種類の文字で書き表し、それぞれに言語名がついていることになる。よく使われる説明として、ウルドゥー語話者とヒンディー語話者は電話で難なく意思疎通ができるが、文通ができない。パキスタンの映画館やテレビでは、ヒンディー語のボリウッド映画が吹き替え無しで上映されている。パキスタン人俳優がボリウッド映画に登場する際も字幕はつかない。

姉妹言語がある故か、ウルドゥー語では文字が大切にされている。イスラームの聖典クルアーンと同じアラビア文字であり、インド亜大陸の栄華であるムガル王朝のペルシア文字である。基本的な書き方は右から左で、単語ごとに文字が連結するというルールはアラビア語に倣う。アラビア語が28文字で、独特の音を追加したペルシア語が32文字、ウルドゥー語はさらにヒンディー語系の発音を3文字足した計35文字である。文字は増えたが、アラビア語では聞き分けられていたいくつかの音は、ウルドゥー語では区別されない。

アラビア文字にはいくつもの書体がある

のだが、ウルドゥー語ではナスターリーク体というフォントが好まれる。アラビア語でよく用いられるナスフ体やスルス体で書き表すことも可能なのだが、ウルドゥー語話者はペルシア語でも使われるナスターリーク体に美しさを見出す。筆者はナスフ体を読みやすく直線的な楷書体、ナスターリーク体は滑らかで流線的な草書体と捉えている。

ナスターリーク体で厄介なのは、文字が斜めに下がるという特徴である。ナスフ体はノートの罫線をなぞるように書くが、ナスターリーク体は罫線を無視して右上から左下に、斜めに下がりながら進む。このため、パキスタンの大学では、学生がノートを斜めに構えて板書している。

このナスターリーク体フォントへのこだわりは、ウルドゥー語話者の矜持のようなもので、なんと1990年代まで日刊の新聞を書道家が全ページ手書きしていた。ひとえに、タイプライターやワープロでは満足はいくナスターリーク体を書き表せなかったからである。パキスタンでは、つい30年前まで職業書道家が活躍し、新聞や雑誌、書籍を日夜清書していた。カラチならば、旧市街のパキスタン・ラジオ局やバハードゥル・シャー・バザールの周辺に書道家が集まっていた。大手新聞社には50人の専属書道家がいて、毎日の入稿に向けて1面を5人で分担していたという。

例えば、ウンマツ紙 *Ummat* では、書道家アブドゥルマジード・パルヴィーン・ラカム (1901-1946) によって作成されたラホーリー・ナスターリークが使われていた。ジャング紙 *Jang* はデリー流とペルシア流の混ざったラクナウィー・ナスターリークで書かれていた。

ウルドゥー語の書道はフシュナヴィース *Khushnavis* やフシュハティー *Khushkhatti* と呼ばれる。*khush-* はペルシア語で美しい、*-navis* は書く、*-khatti* は字を表す。筆は竹や葦を削って作り、筆先は直線で硬い。

本学所蔵の歴史新聞データベースで大手英字紙タイムズ・オブ・インディアを見ると、ウルドゥー語出版業界のフォントにまつわる苦労がにじみ出ている。1931年11月10日の同紙では、ハイダラーバード藩王国でナスターリーク体のタイプが完成間近と報道されている。記事では、ナスターリーク体のタイプは1800年頃からイギリスやエジプト、シリア、インドで開発されているものの「使いにくく醜い」そうで、藩王がスポンサーとなって「美しい」タイプの開発を進めているとある。

何をそんなに悪戦苦闘していたのかと思われるかもしれない。アラビア文字は、右から左へ、単語単位で文字が連結して書かれる。ナスフ体ならば、英語の筆記体の要領で、基準となる線で次の文字に連結できる。しかしナスターリーク体は斜めに下がるため、前の文字と連結する基準の位置が設けにくい。

藩王製のタイプの行方はわからなかったが、ナスフ体のタイプは南アジアに導入されており、ウルドゥー語の印刷業界でも使われるようになっていった。1970年11月30日のタイムズ・オブ・インディア紙では、良い書

道家の確保が難しくなり、ウルドゥー語の出版が滞っているとの報道がある。

1980年代、ウルドゥー語の日刊紙にコンピュータが導入され始めた。まだこの時点では、ナスフ体が多く、便利ではあるがカクカクしていて美しくないものであった。インドのウルドゥー語日刊ヒンドゥスターン紙 *Hindustan* は、創刊の1953年から1989年まで手書きの原稿を印刷していた。事業拡大のため、ディルカシュ *Dilkash* というソフトを開発し、コンピュータ入力に切り替えたという。アメリカのウルドゥー研究の専門誌 *Annual of Urdu Studies* でも、1987年と1990年にC.M.ナイームによる「ウルドゥー語のコンピュータ・ソフトウェア *Computer Softwares for Urdu*」という論考が掲載されている。

1990年代に入ると、ナスターリーク体入力ソフトの開発が進み、長らく書道家を雇ってきたパキスタンの出版業界もコンピュータへ切り替えていった。

例えば、パキスタンの大手宗教雑誌『月刊クルアーンの翻訳者』は、1989年12月号まではすべて手書きであった。翌1990年1月号に、表紙のみ活字となった。少しずつ活字の原稿が増えており、1991年7月に本文の半分が活字になっている。1991年10月に全面活字化された。

ウルドゥー語のコンピュータ入力が定着したのは、1994年に公開されたインページ *InPage* というソフトの影響が大きい。パキスタン人の書道家アフマド・ミルザー・ジャミール (1921-2014) が1981年に編み出したヌーリー体をモデルに、独自のヌーリー・ナスターリーク・フォントを作成している。ジャング紙を始め、またたく間に *BBC Urdu* やパキスタン・インドの主要



な日刊紙、大学、図書館、ニュースサイトなどが同ソフトを採用するようになった。筆者が2000年代に日本でウルドゥー語を習い始めた当時、ナスターリーク体の入力にはInPageしかない状態で、慣れないキーボード配置に四苦八苦したのが懐かしい。

現在は、Google がナスターリーク体に対応するようになっている（Google Input のウルドゥー語対応は2017年から）。ウルドゥー語用のキーボード配置を覚えなくても、発音に対応したローマ字入力からウルドゥー語への変換機能も充実している。Microsoft Word でも Urdu Typesetting などの追加フォントをインストールする形で、ナスターリーク体が使えるようになった（こちらは行間の設定に改善の余地がある）。現在流通しているコンピュータ用の主要なフォントは、Faiz Lahori Nastaliq の他、Jameel Noori Nastaliq や Alvi Nastaliq などで、2019年には Google の Noto Nastaliq Urdu が加わった。

押し寄せるコンピュータ化の波で、すっかり職業書道家の姿は消えてしまったかに見える。InPage 導入後も見出しだけは書道家が担当していたウンマツ紙も、数年前にすべてコンピュータ化された。現在残っている書道家は、商業演劇のポスターや店の看板、道路脇の壁に書かれた広告、結婚式のカードなどを生業としているようだ。

図書館でウルドゥー語の古い（と言っても30年前の）雑誌や本を手にとってほしい。一見活字かのように見える正確さでびっしりと書き込まれた一文字一文字に、名もない書道家たちの汗水が見えてくるようである。



（ラホールの書店街。ウルドゥー語の看板は手書きが一般的）

参考文献：

Calligraphy: A dying art

<https://www.dawn.com/news/1243504>

（2016年3月6日）

InPage

<https://www.inpage.com/>

Ode to the lost art of news calligraphy

<https://www.dawn.com/news/1496799>

（2019年7月29日）

ProQuest Historical Newspapers, The Times of India (1838-2007)

（こちらで同データベースを紹介しています

<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/the-times-of-india>)

# アジア研究図書館利用案内

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/user-guide/guide>

場 所：総合図書館 4 階

開館日：以下閉館日を除くすべての日

閉館日：年末年始(12月28日～1月3日)

定例休館日(概ね毎月第4木曜日)

夏季の一斉休業日(2日間)

試験等大学行事のための閉館日

その他臨時閉館日

貸出冊数・期間：10冊・30日(教職員・学生)

カウンターサービス：平日9：00～17：00

開館時間：

曜日等	通常期	8月・3月
月～金曜日	8：30～22：30	8：30～21：00
土・日・祝日	9：00～19：00	9：00～17：00

学外の方もご利用いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/user-guide/outline/gakugai>

## 次号の予定

第7号は2022年4月1日に発行予定です。アジア研究図書館資料の収蔵状況や2021年度の教員活動報告、アジア研究図書館に導入されたデータベースの概要などについてお知らせする予定です。

ニューズレターへの情報提供・投稿や、記事へのご要望があれば、東京大学アジア研究図書館宛([asialib@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:asialib@lib.u-tokyo.ac.jp))お知らせ下さい。

## 編集後記

第6号をお届けします。今回はこれまでで最も痩せた号となりました。みなさまの積極的なご寄稿をお待ちしております。

編集後記でコロナの話ばかり書くのも芸がありません。とはいえ「そろそろ今年は海外調査へ…」と期待していた矢先、溜息まじりで「仕方がないので今できることをやろう」と、決意を新たにしています。 [J]